

しおんだより VOL.58



我々は連携して地域の在宅医療を支えます！

政府の統計によれば、85歳を超える患者さんの実に6割が、何らかの介護を受けると報告されていますが、そういった方々は単独で医療機関を受診することが難しいです。

月に1回、担当者が当院6階の談話室に集まって、現状を報告し課題を共有することで、さらに連携を深めています。

そういった方に、在宅で過ごして頂きながら、様々な医療職種が訪問して、安心して療養生活を遅れるような環境を創るような取組は、この20年ぐらいで急速に広まってきました。

当初は、医師や看護師の訪問しかなかったように思いますが、その後、歯科医師や薬剤師、管理栄養士なども、患者さんのご自宅等に訪問して、専門的な立場から治療を行っていく形態が整ってきました。

さらに、近年では、こういった在宅医療を提供する医療機関が連携して、地域の患者さんをカバーしていくことが重要視されてきています。当院も、西成区の在宅医療に関する拠点病院であるとともに、機能強化型在宅療養支援病院です。現在、多くの医療機関と連携を組んできましたが、本年8月から特に連携を強化する医療機関を8施設に増やし、さらに安心・安全の医療提供体制を構築できるように努めています。

当院を含めた9医療機関は、月に1度、当院に集まり、それぞれが自院での状況を発表し共有するとともに、課題があれば議論をし関係性を深めていくことで、日常診療の中でも、密接に連携をとれようを目指すことを目指しています。当院も、入院機能を持つ医療機関として、より地域の方々に安心してご利用いただけるように工夫を重ねていきたいと思っています。

ちょっとした心遣いがうれしいですね

その昔、ある患者さんに「病院は、痛いか苦しいかしかせえへんなぁ…」と言われたことがあります。

確かに、病院における治療は、注射したり薬を飲んだり、はたまたりハビリをがんばったりと、少し身体に負担をかけるようなことが多いのも事実です。もとの病気を治すためとは言え、冬場に熱いお風呂につかって、「あー、気持ちいい！」という感じのようになる処置は、あまりありません。



当院3階にある医療療養病床のスタッフテーションには、みゃくみゃくが寝転がって、廊下に行く人に手を振っています。

そのためか、病院全体の雰囲気も基本的には無機質になりがちです。壁も白く、建物も直線で、電気は蛍光灯…。病院を退院して自宅に戻ってホッとするのは、壁の色や建物の形、電気の色など全く地学からなのかも知れませんね。

せめて、季節感でも味わっていただきたいと、今、病棟のカウンターには、季節に合わせた装飾が置かれています。先日、そこにみゃくみゃくが寝転がっていました。なんだか、癒やされるなぁと感じましたが、それはみゃくみゃくを見慣れたからかな！？

知っているようで知らなかったこと

この写真のような人形が、通学路に立っているのをご覧になった方は多いのではないのでしょうか。調べてみると、滋賀県にこの人形を作っている方がいらっしゃるらしく、一つ一つ手作りで仕上げていく様子が、時々テレビ番組などでも取り上げられています。



ところで、これ名前はなんというかご存じですか。私は、「とびだし坊や」とずっと思ってきました。

ところが、先日、このキャラクター(?)を使ったボールペンをいただいたのですが、そこには「とびだしとび太」と書かれていたのです。思い込みって怖いですね…。(文責：狭間研至)



自宅近くの公園にあるこの人形(?)。名前は、とびだし坊やではなかったようです。

しおんだより 第58号 発行日：令和7年8月15日

発行人：狭間研至 発行元：医療法人嘉健会 思温病院

☎557-0034 大阪市西成区松1-1-31 電話06-6657-3711 HP: www.shion-hp.or.jp